



**KANSAI
UNIVERSITY**

教職支援センター一年報

2014

関西大学 教育推進部
教職支援センター

『教職支援センター年報 2014』目次

教職支援センター年報の発行に寄せて	教職支援センター長 山本 登朗	1
投稿原稿		
<小論文>		
ループリックによる文章表現の評価学習法	文学部教授 安藤 輝次	2
社会科で読解力を高める教材の提示法についての一考察	非常勤講師 林 茂幹	11
<報告>		
教職に関する授業での「アクティブラーニング」についての 考察・報告	非常勤講師 尾崎 進	17
教職支援センター特任教授からの報告		
『教職実践演習』についての一考察	特任教授 北井 宏昌	24
「面接対策セミナー」について	特任教授 小野満由美	27
1. 教員の養成の目標		
関西大学教職支援センターの基本理念		30
2. 教員の養成に係る組織		
教員の養成に係る組織		31
教職支援センター規程		32
3. 教員の養成に係る授業科目		
教職に関する専門教育科目および科目担任者一覧		34
4. 教員免許状の取得の状況		
各学部・大学院で取得できる教員免許状の種類・免許教科		40
介護等体験 参加者数		42
中学校・高等学校教育実習生数		43
教員免許状取得状況・免許取得者数一覧		44
教員免許取得までの諸手続き		51
5. 教員への就職の状況		
教員採用試験合格者状況・合格者数		52
教員採用試験「大学推薦」の応募状況・合否結果		55
6. 教員の養成に係る教育の質の向上に係る取組		
中期行動計画について		56
介護等体験事前指導について		57
2年次生対象「教育実習受講希望者ガイダンス」について		58
3年次生対象「教育実習ガイダンス」について		60
教員養成フォーラムについて		62

教員採用試験合格者との情報交換会について	64
教職専門科目担当者研究会について	66
教員採用試験合格者壮行会について	67
教員採用試験に向けて～支援制度を積極的に活用しよう～	68
教員採用試験 面接対策セミナー	69
教員採用試験 受験案内一覧	70
教員採用試験対策スケジュール	71
教職支援センター 利用状況	72
教職関係ガイダンス日程	74
教職実践演習に係る履修カルテ	75
教育実習出向指導校一覧	76
教職支援センターと初等教育学専修との連携について	78
教員養成のための豊能地区3市2町教育委員会との連携協力について	79

7. その他

教員免許状更新講習一覧	80
連合教職大学院学内選考について（2014年度から実施）	81
教職支援センター年報 投稿規程・執筆要領	82
教職支援センター委員会委員名簿	84
教職支援センター特任教授紹介	86

教職に関する授業での「アクティブ・ラーニング」実施についての考察・報告

関西大学非常勤講師 尾崎 進

はじめに

本講義については、昨年ここに掲載された内容に続き、新たに試みたところや改良した点を中心に「アクティブ・ラーニング」の内容にもふれての考察・報告をする。

・アクティブ・ラーニングについて

平成24年の8月の中央教育審議会での「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け主体的に考える力を育成する大学へ～答申」(文部科学省のHP)を参照すると、その中で学修(学習とは区別して、予習・復習を原則として、アクティブ・ラーニングで討議・調査等をするには、事前学習・調査等が欠かせないとのことによる)者が能動的に学習する手法として、アクティブ・ラーニングを取り上げている。その用語集の中には「教員の一方的な講義形式の教育と異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれる教室内でのグループディスカッション、ディベート、グループワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」と示している。また、小中高に対して昨年11月には、中央教育審議会が検討をする学習指導要領の全面改定に際し、新しい時代の実社会や実生活の中で役立つ力を高めるために、これからの「アクティブ・ラーニング」の具体的な在り方について諮問されたところである。ただ、小中高では、すでに実施されている「総合的な学習の時間」の授業内容とも重なり、特に筆者が関わってきた大阪の総合学科の高校では10年前ほどから、「課題発見・問題解決」として積極的に取り組んできたところである。

・背景として

大学で1990年頃から取り込まれることになったのは、大学の大衆化による多様な学生(学力不足が発端)の増加と共に新たな社会構造に多様性が必要となってきたことがあると考えられている。大学より先に1974年以降、義務教育化する高校教育において生徒への学力保障には、従来の授業方法では対処できない状態が起こっていた。社会の変化とともに生徒・学生の変化と「学び」の質的变化への対応が問われてきた。学級崩壊や授業崩壊などを経つつ、教員の指導方法の模索が急がれてきたところである。時代にあった能力の育成に対して、従来の授業方法からの見直しが必要とされてきた。その一つとして「アクティブ・ラーニング」が目する能動的学修等により、育成される生徒・学生の新たな資質や能力が多く場で活かされることが期待されている。

後述の授業アンケートからは、学生自身が従来の授業方法に限界を感じていたことがわかり、この授業方法の意義や有効性等に気付いたとの意見が殆どであった。従来の授業しか知らない学生が、初めての授業体験であり、新鮮に受け止め、自らの場で活かしていきたいと好評であった。こちら側の事前準備等を含め授業内容を理解するには時間がかかるが効果は十分期待できる。ただ、実際の教育現場で取り組むには、教員の研修と準備の負担がこれからの課題であろう。

授業内容

さて前記の点を踏まえ本授業内容を、4回生の授業を中心に記す。昨年から実践している本授業内容であるが、新たには討議を深めるために教室を変えることができての（都合により後期4回生のみとなった。C402教室の机を稼動しグループごと囲み型6,7名の6カ所6班とした）実施となった。また、4回生の後期にはグループごとに1台のノートパソコンの持参（学校側での調達は困難であったため各班での確保とし、持参者の負担はあった面もあるが、準備はスムーズにできた）とした。オリエンテーションとして、昨年同様、教職全般に関しての各自の課題を掘り起こすことに重点を絞り、現時点での学校現場での諸課題を挙げるなどして当事者として学生に問題提起し、どう準備するかを考えさせることを目指すことにした。以下のようなテーマを毎回課した。

- 1回目 教職課程の履修を振り返っての「各自の課題について」
- 2回目 討議の内容をプレゼン形式で発表し「プレゼンの授業における有用性について」
- 3回目 班で討議をまとめるにあたっての「グループでのプレゼン作成について」
- 4回目 討議を深めるのために「課題の発見・解決のプロセスの『見える化』について」
- 5回目 課題発見・解決の試みとして「全国学力テストで大阪府は下位にあり、福井県や秋田県などは上位にあることについて、どう考えるか」
- 6回目 課題発見・解決に有効な手法として「KJ法やSWOT法についての要点について」
- 7回目 「実習で各自行った授業の中で、PowerPointの使用が有効な分野を作成」
- 8回目 文書作成の準備として「保護者等向けの研究授業参観の依頼文の作成」
- 9回目 社会人として各自の職場での「目標設定・評価基準について」
- 10回目 学力向上等の発表の際に討議してきた「教育と福祉のかかわりについて」
- 11回目 学校でのクラス運営として、「多数決のルールが行われるがその際の留意点について」

以上の課題を次回の討議内容としているため、全てを次に記すルールで実施するには、討議に時間のかからない6,8回の内容などを入れたが、(6回などは実践してみたかったが)時間的に厳しいため11回までの課題となり、12回にはアンケート実施、13回は残りの課題の実践等で最終回は各自一人一人による本講義での2分程度の振り返りを実施した。

ルールとしては、昨年と同様の内容を取り、以下の要領で留意すべき点を促した。

- ① 一斉授業ではなく、授業形態を班ごとに討議を行い、真理・正解を求めるものではない。
- ② 討議・検討すべきテーマは班で決める。
- ③ テーマごとの自らの意見と他の意見、客観的な事実等をもとに班として意見をまとめる。
- ④ 司会・記録・発表の役割を決め、記録者がグループの了解の元、連名の記録を提出。発表者が前で発表をする。発表者は何故そうまとめたか論理的に伝える。
- ⑤ 各グループは2・3回ほどの討議後、異なる役割やメンバーへと移動する。

アクティブ・ラーニングの実践として

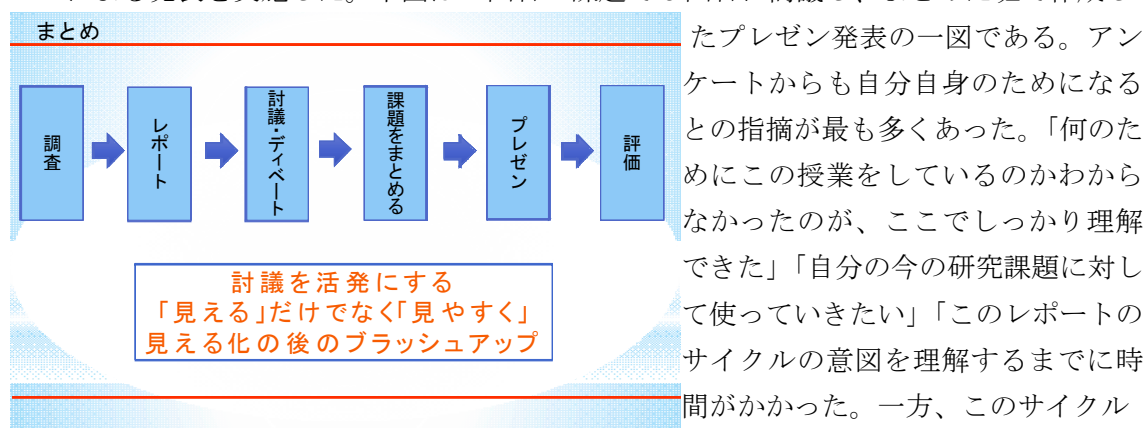
以上の授業概要から、冒頭の「アクティブ・ラーニング」についての経過や意義等は前述の通りであるが、以前から授業に取り入れ実践してきたことが、ご覧のごとく「アクティブ・ラーニング」そのものと考えられる。教職を目指す学生が、このような学びを実践

するところは、学校現場のみにかかわらず、社会人として多くの場面で必要な力の育成になると考えた次第である。昨年の実施状況から、学生同士の交流も促すために今年度は新たにグループの班長を決め、班を統括するようにし、役割を固定した。座席についても昨年の学生からの指摘もあり、座席まできっちり指示しなければ、どうしても仲間同士で集まってしまう、雑談となるとの指摘があったので、こちらで予め決め固定とした。初回はアイシングとして、自己紹介（目指す将来像・趣味などを3分程度）し、次者は前の人の話を聞いたところを何かほめるように指示して実施した。昨年と同様、学生同士、意外と知らない面が多く、新鮮だったようである。4回生は昨年からであるが、このやり方にはまだまだ定着できていない状態であり、最後まで同じ班の学生の名前がわからないということもあった(出欠の際、欠席学生の名前が言えないで、当初から何度も横の連携を促してきたにもかかわらずこの状態である)。しかし、班での交流が同じ目標を持つもの同士、とても有効であったとほとんどの学生が感じるアンケート結果がでていた(中には知らない者同士で居場所がないとの記載者3回生1名がいたが、今講義はこの点をどうするかを考える授業であることの説明を繰り返す中で納得できたようであった)。個人名の件はさておき、まずは討議する場をつくることができた。討議の準備として事前に課題を課し、レポートを作成させたが、これは昨年と違い、全員が自らの保存のためにも電子データ化して提出するようにはなった(3回生は初回の指示が功を奏したのか全員提出した)。

授業内容のアンケートから

アンケート結果には、このレポートの準備がかなり負担であったことを、ほとんどの学生が記載していたが、授業4回目の課題である「見える化」で、その必要性を痛感して事前課題の必要性を指摘していた。「レポートによって、自分自身の考えをまとめ、討議、プレゼンでこれらを深めていくことで、討議自体がより良いものになる」「出される課題が、どう教員という仕事の中で生かされてくるのかわからない課題がありました。次の授業で解説を聞けばわかるけど、出された段階で意図をよみ取れにくかったため難しかった」など、下記にもあるような同内容が多くあった。

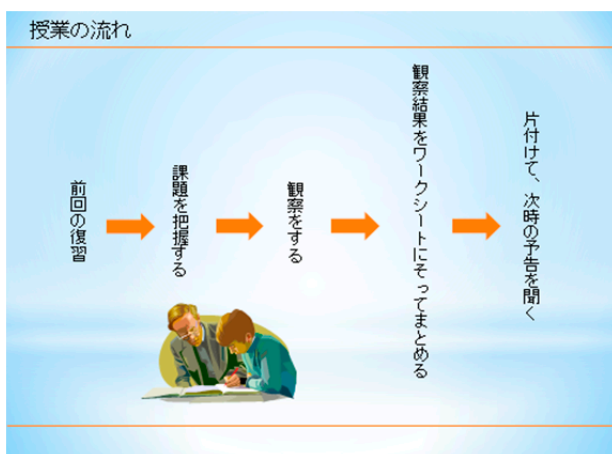
特に、**レポート提出⇒討議⇒課題のまとめ⇒発表⇒改善⇒元のレポート**の流れを示したことで、多くの気づきが学生の中で起きたと思われる。また、4回生にはこの流れにプレゼンによる発表を実施した。下図は4回目の課題で5回目に討議し、まとめた班で作成し



と目的を認識できてからは、この授業だけではなく自分の生活に活かせるものだったので

討議し始めたのが効果的であった。各班で記載したサイクルとしての発表の一つが前左の一例である。どの班も従来の一斉授業には限界を指摘し、教員数の増員の必要性をあげていた。教員定数や予算的なことの決まりなどからは、大学生のボランティアの充実など外部地域社会への働きかけの取り組みを発表していた。またこの授業のように、討議を中心にした方法を取り入れることの大切さを指摘していた。ここでも10回目の課題である「福祉」にかかわる問題も、家庭の経済的問題としてとらえる面より、都会と田舎としてとらえることの方が、学生にとってわかりやすかったようである。自らを反映して都会では遊ぶ誘惑が多いということであった。現時点での社会情勢の学生の把握の必要性を感じ、10回目の課題とした次第である。「学力低下の問題、塾講師のアルバイトをされていて、強く感じていたのと討議できてよかった」「大阪と秋田の学力差について考え、学力向上のためにはどうすればいいのかの討議が面白かった」「学力差をどう考えるかについては、意外と根深い問題だったのでよかった」などの記載が多くあった。

「実習の振り返り」は、討議時間も確保でき、自らの経験としても話す内容が多かったとことがうかがえた。「自分自身の悩みや課題を共有できたこと。また解決では自分では出てこない案があつたりしてよかった」「実際に現場に行き行って感じたことなので意見が生々しかったり、共感できる意見が多くあった」「復習にもなり非常にためになった。今回はPower



Point だけだったが、ホワイトボードを使っての授業をやってみたかった」

さて、本授業の最後としての取り組みは、7回目の課題である「実施してきた実習での授業の分野でPower Point を使ってやってみた方が効果的と考える『授業計画』を各学生が作成すること」であった。サイクルとして各自の紙面に落としこんできた授業案から各班の代表を一つに絞ることにし、8回目授業から

討議を重ね、できた班からの発表とし、発表者は作成者と限らないとして6班の発表を一班ごと丁寧に実施した。発表を重ねるごとに後で触れるがその都度の発表についての評価を参考にしてブラッシュアップすることとした。上図はある班の授業の一コマである。評価については、発表後に下の票(従来使用)の観点に加え、新たな3点を考慮に入れ協議して班として決めて「なぜそのようになったのか」を指摘することとした。

①内容のわかりやすさ ②出来栄え(表現力・デザイン力等) ③Power Point の完成度(創意工夫等)評価を点数化して(100

声の大きさ	A B C D	内容の準備度合	A B C D
板書の見易さ	A B C D	時間配分	A B C D
内容の理解度	A B C D	授業への工夫	A B C D
立居振る舞い	A B C D	言葉使い発問等	A B C D

点各自の点数を班でまとめることとした。班の評価が各自の評価となることを挙げモチベーションを図る。

学生はPower Point の授業への使用

に関しては、いたって冷静に受け止めていることがうかがえた。実施後のアンケートによると、「板書の時間が省けてよいが、教師のペースになりがちである。表現や指導の工夫ができるのはよい」「今までの理科教育法などの授業よりも確実に発表がしやすい。しかし分

野が異なると興味が薄れてしまう」「PWと板書の両方を使えばもっと効率よく授業ができると思う。手書きでは難しい図や表をPWで表し、生徒の意見など想定外のことは手書きで伝えるとスムーズに進む気がする」「PWを使える授業、使いにくい授業があることを実感した。PWは応用が利きにくいところがあるために中学より高校に向いていると思った。PWの使い方については人それぞれアニメーションの使い方などあるのでとても勉強になった」「臨機応変に使い分けできればPWを使う方が良いと思います。PWは板書よりメリットが多いと感じた。板書時間が減少するため生徒との対応する時間が増え、そのためより良い授業環境が作れると思います」とほとんどの学生が同じように使い分けを考えて積極的に利用したいと記載していた。

後は準備や設備の面などについてのことを気にかけていた。「PWでの授業は資料作成に最初は時間が要するが、行うことは分かりやすくよいと思いました。しかし設備などが整っていないと一方通行の授業になりかねないと思いました」「板書する時間がないため授業のテンポが早く感じられた。PWで単に授業を行うのなら板書する授業の方が良いと思った。ただし、PWで放映しながらスクリーンに書き込みができるような設備の整った環境ならPWを使った授業は良いと思う」「何度も同じ授業をすることを考えると1つPWを作れば使いまわしができるのでよいと思った」「生徒がPCやタブレットを持っていない限り全てをPWで授業することは適切でないと感じた。ただ、図や表などデータを示す際には使えると思ったのでケースバイケースであると考え」「これからの中学や高校での授業はPWが主流になっていくところもあると思うので板書を使わないパターンを経験することは素晴らしいことだと思った」などがあつた。

後は評価について触れておく。各課題の班ごとの発表後に他の班で協議し決めるのだが慣れていないことと評価基準が備わっていないことからマイナス面を指摘する度合いは弱くなる傾向があつた。しかし、アンケートからは殆どの学生が必要性をあげ、もっと協議時間の確保を要望していた。「自分たちが良いと思って出したものでも他者が見ての評価された時自分たちと違った見方・考え方で評価されるので多くの考え方・見方を発見でき、とても有意義だと思います」「新たな課題発見につながり自分自身のステップアップにつながると考える」「客観的な評価が知ることができるので取り入れるべきだと思います」「評価は必要だと考えます。採点は難しいと感じましたが、自分の班の発表に対する他の班からの率直な感想が聞けて点数で評価されるのは分かりやすかったです。また、意見が聞いたのが良かったです」「自分たちは90点100点のできでやっているつもりが大体はそれ以下の評価である。そこから新たな課題やより良い表現法に気付いたりできる」「挑戦し甲斐があつて自分では気づかなかつた課題も見つかり有意義であると考え」「班ごとに発表し、評価しあうことで新しい考えも生まれるのでよいと思う。また、点数での評価はモチベーションアップにもつながるのでとても良いと思う」と総じて積極的に捉えている状況が伺える。必要性のなさの記載はほとんどなく、今後の課題となる指摘がわずかではあるがあつた。「評価をしっかりと伝えないと意味がない」「発表の仕方に評価が傾き、意見も班により似たものになる」「途中からはどの班も評価が適当になっていたので、もう少し面倒くさい評価方法にしてもよいと思った」「発表中盤から班の評価が点数のみになってしまい点数の足りないところがどこか見えてこなかった。理由をしっかりとつけるべきである」「時間があれば個人個人に評価してもらった方が発表者のためにもなると思った」

欠席の課題

最後に受講の一つの結果としての出席に関して記すことにする。3回生の「事前指導」では、欠席率は0.675（昨年0.65）（15回中40名欠席総数27回[昨年26回]）で昨年の3回生の時と殆ど変わっていないが、その3回生が4回生になると春の「教育実習二」では、1.18（昨年0.41）（9回中39名欠席総数46回（昨年17回）、「教育実践演習」では、欠席率は1.89（昨年1.1）（15回中40名欠席総数74回（昨年36名40回）となった。今年度は出席支援スタッフを利用し、班長による欠席者報告との併用で（自らも出欠を取っていたが、照合結果で班長の申告にはズレがあることがあった）、学生への出欠への意識付けを促した。にもかかわらず今回のデータを見る限り、3回生時点は欠席等は同じ状況と考えられるが、4回生になると皆勤学生は3回生では17名いるが4回生では春は10名、秋になっては3名となる。4回生では後期の学生状況を考慮される状況が課題となる。